

四門出遊寸劇台本

キャスト 王子
 王様
 家来
 チャンダカ
 老人
 病人
 死人

ナレーター

シッダールタ王子がのうこうさい農耕祭の時に、たがや耕した土の中から虫が出てくるのを見ました。

そこへ小鳥が飛んできて虫をついばんでしまいました。その小鳥をたか鷹が飛んできて食べてしまった。生きとし生けるものの弱肉強食の様子を目にしたシッダールタ王子は、深く悲しみ悩み、一人で部屋に閉じこもることが多くなりました。

王様は、ふさぎきっている王子をかんが鑑み、お城の外に遊びに行つてはどうかと思いを告げた。

王子は、王様の意見を受け入れました。

一幕（王様と家来）

王様 「王子がこれから外出するので、みち道路沿いをきれいに片付け、水を打って

掃除をし、こう香を焚き、ごみ一つもおいてはならない！よいな！」

家来 「はい、分かりました。王子様の通る道は、きれいにしておきます。」

二幕（東の城の門前）[王子、家来チャンダカ]

王子 「チャンダカ、ここは東の門だなあ」

チャンダカ 「はい、王子様、ここは東の門で、今日は、ここから町に遊びに行きたい
カ と思います。」（王子とチャンダカ、營火の回りを回って歩く。そつと老人が出てくる。王子道のかたわらにうずくまっている老人に目がいく。

「これは、いったいどういう人なのだ！チャンダカ」

王子

チャンダカ 「老人です」

王子 「老人とはいったい何なのだ？」

チャンダカ 「人はとし齡をとるとからだ身体はおとろ衰え、気力はなえ、立ったり座ったりするのが、

他人の手助けがいるようになりまる。目は見えにくくなり、また耳は聞こえづらくなるのです。いろいろなことをすぐに忘れるようになってしまい、残りの命もいくらもないのです。これを老人と言うのです。」

王子 「チャンダカ、老人とは誰になるのか？」

チャンダカ 「老人は、人が長生きすればみんななるのです。」

王子 「私もなるのか？」

チャンダカ 「はい、王子さま、お金があっても、地位があっても、みんな、なるのです。逃れることは出来ません。王子もやがて老人になるのです。」

王子 「人が生まれて〈老い〉という苦しみが待っている。それなのに、どうして老いを忘れて楽しむことができようか！チャンダカ、外出はもうやめよう！」

(王子、チャンダカは、引き返す)

ナレーター こうして外出を取りやめた王子でしたが、しばらくして王様の^す勧めもあつて南の門から外出することになりました。

三幕 (南の城の門前) [王子、家来チャンダカ]

王子 「チャンダカ、この門は南の門だなあ」

チャンダカ 「はい、王子様、ここは南の門です。今日はここから町に遊びに行きたいと思います。」

(王子、チャンダカ、歩き出す。病人脇から出てくる。)

王子 「この人は、いったいどうゆう人なのだ、チャンダカ」

チャンダカ 「病人です」

王子 「病人とは、いったい何なのだ！」

チャンダカ 「人はある時に病気になるのです。病気になると、時に熱が出たり、体が重くなったりします。あのように痛み苦しみ、あぶら汗が出たりします。もちろん一人で歩くことも出来ません。また、意識を失うこともあります。これを病人というのです。」

王子 「チャンダカ、病人とは、誰になるのか？」

チャンダカ 「病人は、人は誰でもかかります」

王子 「私も、かかるのか？」

チャンダカ 「はい、王子様、みんな病気になります。王子様とて例外ではありません。」

王子 「人は、生まれ〈^{びょうき}病気〉という苦しみが待っている。それなのにどうして病気を忘れて楽しむ事が出来ようか！チャンダカ、外出はもうやめよう！」

(王子、チャンダカは引き返す)

ナレーター こうしてまた外出を取りやめた王子でしたが、しばらくして王様にお勧めで、西の門から外出することになりました。

四幕 (西の城の門前) [王子、家来チャンダカあらわれる]

王子 「チャンドカ、ここは西の門だなあ」

チャンドカ 「はい、王子様、ここは西の門です。今日はここから町に遊びに行きましょう」

(王子、チャンドカ歩き出す。反対の方から死者を弔う葬列に会う)

王子 「みんな泣いているが、あの人たちは何をしているのか？」

チャンドカ 「王子様、あの方は、亡くなられたのです。これから遺体を焼きに行く行列です。」

(寸劇では、人を乗せる板が無い場合は、今死んだ枕経に変えても良い)

「人は、亡くなると、二度と生き返ることはありません。」

王子 「チャンドカ、死人は誰がなるのか？」

チャンドカ 「死は、人に生を受けた者は、必ず迎えなくてはなりません。」

王子 「私も死ななければならぬのか？」

チャンドカ 「はい、王子様、生を受けた者は、皆死ななくてはなりません。」

王子 「人が、生まれ〈老〉〈病〉〈死〉という苦しみが待っている。それなのに〈老〉〈病〉〈死〉の事実から目をそらす。他人事として自分には無関係なように思いこむ。楽しいことだけ考えて愉快に過ごすことは、私には出来ない。チャンドカ、外出は、もうやめよう！」

(王子、チャンドカ、引き返す)

ナレーター

三つの門で、〈老〉〈病〉〈死〉の事実と直面した王子は、不安と恐れを持ちました。限られる〈いのち〉をどのように生きてらよいかという問いが生まれました。そして、ある日、王子はみずから外に出たいと思うようになりました。

五幕(北の城の門前) [王子、家来チャンドカあらわれる]

王子 「今日は、北の門から外出してみたい。チャンドカ、お供するように！」

チャンドカ 「はい、かしこまりました。いっしょにお供いたします。」

王子・チャンドカ歩き出す。一人の静かな安心した姿をした沙門登場。整った身なり、鉢を持っている。

王子 「あの方は、心豊かに見えるが、いったいどのような人なのだ！」

チャンドカ 「あの方は、出家し、修行している人で、沙門と呼ばれています。」

王子 「沙門とは、いったいどのような人なのだ。」

チャンドカ 「私が聞いたところでは、沙門は道を求めて家や妻子を捨て、愛欲も捨てる。そして純粋な心を得て、すべてのよこしまなものを滅ぼすといひます。さまざまな憂いや苦しみを逃れ、自由自在ということです。」

王子 「素晴らしい、これこそ本物だ！」

ナレーター このことを通して、シッタールタは、沙門の姿に感動し、人が目をそむけてさけている〈老い〉〈病み〉〈死ぬ〉いのちの事実を直視して、真に生きることを求める道を勇気を持って歩み出すのでありました。